

会派視察・研修報告書

会派名 市井の会

代表者名 加藤 元司

1 日 に ち	令和 2年 2月 6日 (木) 11:15~12:30
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	テーブルウェア・フェスティバル 主催者：テーブルウェア・フェスティバル実行委員会 会 場：東京ドーム
3 参 加 者	奥村孝宏 佐藤信行 古庄修一 松浦利実 若林正人 林 美行 加藤元司 仙石三喜男
4 調査・研修の テーマ	テーブルウェア・フェスティバルは、日本の暮らし方の原点である“和の心”に立ちもどる生活空間を核としながらも、生活様式が変わった時代に合わせて、洋食器、ガラス器も含めた「新しいライフスタイル」として提案されており、「食と器で育む豊かなコミュニケーション」という視点での、新しい文化の有りに向けて、食と器に関する日本国内の伝統産業関係者の意欲、とこれからの市場の方向を知ること。
5 主な内容	国内最大級の“器の祭典”として毎回好評を博している『テーブルウェア・フェスティバル2020』、今回で第28回目を迎え、新しい工芸の時代を迎えていると確信が持てるフェスティバル。 今回の特集企画は、美食の国イタリアがテーマ。イタリアの生活に息づく明るく楽しいデザインは、美食の国の食卓を彩る欠かせない要素。個性的でインパクトのある食器から、職人手作りの味わい深い食器まで、多種多様な素材を用いた豊かなイタリアを楽しめます。もう一つは瀬戸焼。受け継がれた伝統技法を駆使しながら、現代の作り手たちが様々なアイデアにより新しく創り出す器の数々が登場します。さらに、和と洋のハーモニー。オリエンタルな洋食器による「和」のしつらえと、日本の硝子による「洋」のしつらえの美しきクロスオーバーな演出をした、生活を豊かにすることによる、食卓を彩る器の可能性が展示されていました。

6 所感、提言事項、課題等

【議員氏名】加藤元司

今年のフェスは2月2日～2月10日の開催で行われた。東京へ着いて先ず感じたのは、電車の中の乗客のマスク姿でした。10人中7～8人はマスク着用であったと思います。こんな様子ではドームの人の入りも影響を受けているのではないかと心配しましたが、やはり、例年の雰囲気と比べて2～3割は少ないように感じました。多陶商の理事の方のフェイスブックもありましたが、来場者はかなり減った。高級品の売り上げに影響があったという感想がありました。

この時期は、コロナウイルス騒ぎに巻き込まれたことが大きかっただろうと思います。

また、全般的な感想としては、情報の伝達が早くなったことが原因であるのか、どの産地も似た型、色が多くなり、産地毎の特徴が薄れてきているような気がしましたが、私の個人的な印象なのかどうか。

テーブルウェアの展示も何年も見ていると新鮮さを失ってくる為、これらに対する工夫も必要かと強く感じた。

【議員氏名】仙石三喜男

テーブルウェア・フェスティバル 2020 東京ドーム

今回の視察日の2月6日は、フェスティバル開催のなか日の為か、今話題のウイルス感染の予防の為か、例年に比較して来場者が少ない感がした。実際に現地で販売されている方にお話をお聞きしても同様のご意見であった。毎年本視察に来て思うことだが、高い入場料を負担してもこんなにも多くのお客様がある、購入者がいることに感激すると共に「食と器の祭典」として評価します。最近の市況は、少し不景気の感がするなか会場の雰囲気は高い商品を求める元気な消費者（特に奥様達？）の会場のようでした。従って、同僚議員の所感もそうであったが、どうもお客様は高級感を求める傾向が強いかと感じたところです。機会があったら後日、出店者の方か、多陶商の方に消費者の動向を確認してみたい。

【議員氏名】林 美行

今回のテーブルウェア・フェスティバル 2020 は、多治見市の将来の可能性を改めて感じることができました。生活工芸の主要な器材になりうる方向がはっきりと見えてきたと感じました。

ジャポニズム—和と洋のハーモニーでは、オリエンタルな洋食器による「和」のしつらえと、日本の硝子による「洋」のしつらえの美しきクロスオーバーな演出が展開されていました。

多治見市の展示はそういう空気は理解した取り組みでしたが、器を通して生活文化を創り出していくというところまではたどり着いていないように感じました。

6 所感、提言事項、課題等

【議員氏名】若林正人

毎年この時期に開催される同フェスティバルを楽しみにしてきました。その最大の理由は、生産地に住む人間として、東京の持つ「貪欲な購買層(消費者)」を現実目にすることができる機会として捉えてきました。しかしながら、今回は入場前、水道橋駅を降りた時から、いつもと何かが違うものを感じました。入場して来場者の少なさを見てよく理解ができました。「新型コロナウイルス」の感染拡大の影響によるものだろうとは思いますが、今にして思えば、毎年このイベントは「春節」の時期と重なり、多くの中国人の歓声・奇声に眉をひそめていたことを、今は懐かしく思い出します。改めて、中国人の購買力に支えられた催事であることを痛感する次第です。同催事への出展は平成14年度から今回で18回目とのことですが、年々その出展意義・目的が曖昧になってはいないのか、疑問を呈したい。

今回は、国際陶磁器フェスティバル及びセラミックバレーのPRを兼ねてとのことなのですが、出展の主目的とは何なのか、流石に開催中の直売総量とは思わないが、将来への販路拡大なのか、陶産地としての知名度を高めたいのか、それとも、美濃焼独自の学術性・芸術性をアピールしたいのか、求めるものが多すぎる気がしてなりません。

蛇足となりますが、東京近在に住む私の姉は、大変な陶磁器愛好家で同催事のみならず、多くの友人知人とともに本市にも何度も来訪し窯巡りをする程の元気な高齢者なのですが、同催事会場である「東京ドーム」の形状への不満は当初から多く、特に、飲食面(質量ともに)への不満は当初から強く言われていましたが、近年では「不規則な階段の上がり降り」と言う肉体的問題で来場できないと言います。

全てを含めて、「一度立ち止まって考える」...再考の時期との思いが強い。

【議員氏名】松浦利実

テーブルウェア・フェスティバル2020は北欧、英国、ドイツときて、今年はイタリア！イタリアといえば、陽気で情熱的、そしてオシャレで美食家なイメージがありました。

また、各界の著名人による個性豊かな「おもてなしの食空間」を見ますと、様々な個性が表れています。

一人一人の生活を充実させる素材が陶磁器というふうに考えなおし、模倣して、価格を安くという視点を変えなければいけない時に来ていると強く考えました。伝統工芸という既成概念を改めないと、多治見市の地場産業の先は明るくないのではないかと。

6 所感、提言事項、課題等

【議員氏名】古庄修一

例年開催されている東京ドームでのテーブルウェア・フェスティバル、毎年 25 万人もの人がこの会場に訪れていると聞く、まさに圧巻の展示会である。今年のテーマは「暮らしを彩る器展」だと思ったが、例年同じような展示会であるため、内容よりも気になりとなるのが多治見ブースであり、例年同じ美濃焼のコーナーであることはいうまでもない。今年の入場者はいつもの展示会と比較すると新型コロナウイルスの関係なのか、今起きている感染者拡大のせいなのか、例年より何割か少ないとも感じた、今まさに世界中がこの感染の問題に取りつかれている。こうしたことが発生すると世界の情勢までもが振り回されてしまう。勿論今、日本の国内に於いても、インバウンド客が大きく減少してきている。早く終結していくことを願ってやまない。

話を戻すと、多治見美濃焼ブースについては例年と同じほどの人数が訪れていた感じで大変好評であった感じがした。せとものを扱う瀬戸市のコーナーでは、瀬戸の観光大使「瀬戸朝香」氏が来ており、このブースは特ににぎわいを見せていた。多治見市も観光大使となる人を多く抱えており、こうした機会に自己のPRとともに貢献してほしいとも思う一面であった。多治見市のイメージキャラクターのうながっぱなどの会場入りは認められないものか、街の魅力と美濃焼振興にもつながれば大きな効果が見込めるのではと思う点もあった。多治見人はどことなく発信力に欠けているとも何かと遠慮がち、これが良いとも悪いともつけがたい点でもある。

全体に感じた点では多くの陶器、これまでは全体に一個の値段形成これまでは、一個例えば 500 円、800 円といった何でも安い価格から大幅に料金体制がアップしてきている点であるといつてよい。

これまで、安いとされる品物が価格の表示アップでより良い品となってきた感じがした。もう安さではなく作家の作品として丹精込められた商品として販売したことが、かえって人の目を引き販売にも貢献出来てきているのではないかとも思った。議会の総意で決めた美濃焼を使おう条例に貢献できることを期待してやまない。以上

6 所感、提言事項、課題等	【議員氏名】佐藤信行 今年も、東京ドームで開催のテーブルウェア・フェスティバルに足を運び、多治見のブース及び全体を視察して参りました。 多治見のブースは、全体コンセプト「日本の器を訪ねて」にカテゴライズされ、「わたしの逸品 まいにちの逸品」をテーマに開催されておりました。 普段使いの器から伝統的な技法を用いた器まで扱う豊富な品揃えに、足を運んでくださった方々に美濃焼の魅力を発信されていました。 全体としても、多くの方の来場があり、大変賑わいのあるイベントであったと感じました。 今後も参加することによって、多治見の美濃焼がさらに多くの食卓にならぶ事を願っております。
	【議員氏名】奥村孝宏 昨年末に多治見市美濃焼振興協会長からご案内をいただき、初めて東京ドームの「テーブルウェア・フェスティバル 2020」を見させていただきました。全国各地からの他、海外からも出店があり、広い東京ドーム内が狭く感じるほどでした。多治見市、お隣の土岐市は外周通路に面した位置にブースを展開しているのが特徴的でした。また、多治見市のブースが以前、ナゴヤドームで開催されていた「やきものワールド」や最近セラミックパーク MINO などで見たメーカー（窯）ごとの展示ではなかったので、ブランドで見るのではなく、一つ一つの商品（作品）を見るものだと思います。 先輩議員が例年に比べて人が少ないと言われていましたが、結構な入場だと私は思いました。ただ、多治見市への費用対効果がどうか、いろいろな場面で今後、確認していきたいと思います。また、野球場なのでやむを得ないと思いますが、3階建て分の階段を昇り降りすることで来場を敬遠する方（高齢者）がいないか、会場でのアンケートなど気になりました。

会派視察・研修報告書

会派名 市井の会

代表者名 加藤 元司

1 日 に ち	令和 2年 2月 7日 (金) 9:30~12:00
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	栃木県佐野市
3 参 加 者	奥村孝宏 佐藤信行 古庄修一 松浦利実 若林正人 林 美行 加藤元司 仙石三喜男
4 調査・研修の テーマ	本庁舎建設事業について
5 主な内容	佐野市本庁舎建設に至る経緯 ①場所の選定について ②市議会の同意について ③市民への説明・関心度 ④建設内容に対する要望処理 本庁舎建設の内容 ①特筆すべき点 ②災害対応について ③非常用電源について (72 時間以上稼働するか) ④本庁舎が果たすべきまちづくりとしての機能 について視察を行った。

6 所感、提言事項、課題等	【議員氏名】 加藤元司 近づく本庁舎建設に備え、2016 年に新庁舎を建設し、規模も人口 11 万数千人と多治見市に似た佐野市の庁舎建設の経過を聞くことで、今後の我々の参考になるであろうと考え、視察をさせていただいた。 場所の選定については、先ず 6 カ所の候補地を挙げ、用途地域の制限などから 2 カ所に絞り、整合性・利便性・交通体系など 9 つの視点から点数付けし、旧本庁舎敷地と決定した。 市民への対応では、自由意見募集 809 件、パブリックコメント 2 回 (362 件・97 件)、政策審議会 1 回、建設に関するワークショップ 2 回 (一般・中学生)、施工段階のワークショップ 4 回 (町内役員・職業体験)、現場見学会 13 回、ホームページ・広報紙での説明を行った。特に、市民ワークショップでは市民活動スペース・佐野市紹介スペース・展望ロビー開放等の意見が採用され実現された。 建設内容では、防災安全機能・環境配慮・市民利用機能・木質化・議会機能の充実・ロビーコンサートやイベントへの配慮が実現された。 非常用電源として発電機と蓄電池を設置し、18,000ℓ の軽油を貯蔵、72 時間の発電を可能としている。庁舎は市の象徴・ランドマークの一つであり、まちづくりに果たす役割が期待され、賑わいの創出に貢献できる様配慮される必要がある。 なお、計画の途中に於ける市庁舎計画が 10 階建てから 7 階建てに設計変更が行われたが、市民ワークショップの意見が大であった。
	【議員氏名】 仙石三喜男 現在、本市において本庁舎の建て替えと移転の議論の最中での今回の視察は正に好機を得た視察となった。佐野市は、平成 17 年に合併、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災被災後に新本庁舎建設の議論をスタートされた経過である。6 カ所の候補地を選定し、最後 2 カ所に絞った上で上位計画との整合性、利便性、交通体系など 9 つの視点から点数付けを行い、庁内で旧本庁舎敷地に決定された。まさに、決定の手法等については、本市の昨年来の進め方と似ており、大変関心を持って実情等を聞いてきた。最後の場所を決定する市議会の同意は、平成 23 年 12 月議会の設計委託料補正予算の議案により、議決され決定となったとのことでした。12 月議会の本議案の議決は、補正予算の審議として扱われ、表決は 12 対 12 の同数となり、議長採決で市提案の場所は (旧本庁舎) と併せ補正予算が可決された。

6 所感、提言事項、課題等	ここで議長がどう判断されたか？については、現担当者からは今となっては明快な説明は無理のようでした。 審議のなかで大きな反対理由は、多くの市民の方からも要望が出されたグランドデザインを示されないままや、佐野地区の土地利用の十二分な議論がなされていない。片や賛成意見は、合併後4つの庁舎に分かれている。地震もあった！また、市民病院の課題もあり、市としてスピードを求めたとのことでした。 本市は、しっかり議論を重ね、議会の判断が今後重要となると認識したところです。 以上
	【議員氏名】林 美行 震災で庁舎が損壊し、新庁舎建設という取り組みとなった佐野市。視察で感じた点は、市民説明の丁寧さでした。計画策定前の自由意見募集では809件の意見があり、計画策定時のパブコメには362件、基本設計時は97件。設計に関するワークショップ2回、施工時が4回など、市民のみなさんの思いが集まった事業になっていることに驚きました。顧みるに多治見市では、できるだけ市民に話題を提供せず＝地区懇談会のテーマにもなく、説明会も2カ所という程度＝に済まそうとする姿勢が感じられるようです。 市役所はやはりシンボルです。市民のみなさんの気持ちが固まらないといけないものだと考えます。 佐野市では、場所については、合併協定書、市民の利便性、中核的な位置、関係法令への適合、私有地などの前提条件をもとに6カ所の候補地を選定し、用途区域の制限から2カ所に絞った上で、新庁舎建設検討委員会において旧本庁舎敷地に決めています。やはり旧本庁舎という市民意識が強かったのかと考えました。 分庁舎問題があるため、引き返せないと考える市側の意識がどこかにあり、市民にとっての最大の事業となるべきものが、こそこそと進められており、とても勿体ないことになっていることが残念だと感じて帰りました。

6 所感、提言事項、課題等	【議員氏名】若林正人 正に、タイムリーな視察であった。 佐野市における「本庁舎建設事業」は、本市の同事業とは、些かその事業化経緯が異なる点から認識をしておく必要がある。 現在の佐野市は、2005 年 2 月 28 日、旧佐野市と旧田沼町・旧葛生町の 1 市 2 町の合併により誕生。よって、御市の「本庁舎建設」は、合併協議書・新市建設計画に基づき、財源についても「合併特例債」を総事業費の半分投入することが決定されていた訳である。 しかしながら、2011 年の東日本大震災により御市でも庁舎が被災、従来からの 2 分庁舎・仮設庁舎を含め 4 庁舎体制を強いられることとなり、防災面の強化を含め、従来からの新庁舎構想は再検討されることとなった。 新たな本庁舎の建設地については、旧本庁舎跡地に決定したことから、議会での「特別決議」の必要はなかった。 私が今回、特に注視したい点は特質すべき建設内容等ではなく、建設に至る経緯においての「市民への説明及び市民の関心度の高さ」についてであります。 計画策定前に行われた「自由意見募集」に対しての市民からの意見総数 809 件、2 度に亘るパブリックコメントへの意見数は、計画策定時 362 件・基本設計時 97 件その後の流れにおいても、設計に関するワークショップを、一般市民と中学生のそれぞれに開催、施エワークショップを 4 回、建設工事中の市民向け見学会を 13 回開催し、市民とともに作り上げたと自負する・自負できる職員の誇らしげな顔が眩しかった！ 市民の声により、当初計画の 10 階建てが 7 階建てに、立体駐車場から地下駐車場と平地の併用に変更と、市民意見の多くが尊重された。市民活動スペースの確保・展望ロビーの開放など、至るところに「市民との協働」の理念を感じることでできた視察であった。 是非とも、今後の委員会運営に活かしたい。
----------------------	---

6 所感、提言事項、課題等

【議員氏名】松浦利実

佐野市役所建設において、防災機能という視点、にぎわいづくりが必須という視点に共感を持ちました。

庁舎地下の備蓄倉庫、屋上の非常発電装置、蓄電池、連続 72 時間連続発電できるよう 18000ℓ の軽油の備蓄などの防災安全機能。

また、イベント開催広場や展示スペース、市を紹介するスペース、市を紹介するスペースを併設。よくまとめられた庁舎にされていました。

そして、もう一つの大きな特徴は、市庁舎は市の象徴、ランドマークであり、地域の核となり、市民の心の集まるところという視点で整理されていることでした。

翻って、多治見市を見ると、急遽作った分庁舎問題があるため、今後 100 年の多治見市の根幹という視点が消えてしまっていることが残念と強く感じました。

【議員氏名】古庄修一

平成 27 年 11 月に完成とのことであったが、これまでどのような過程で建設が進められたかなど、当市の議員からも多くの質問が寄せられた。ここの本庁舎の建設に当たっては多くの反対はなかったと、市民合意の上での建設となっている。

しかし、反対はあまり多くなかったとあるが、土地利用の在り方や位置などについては多く議論がなされたと聞く。

中でも特筆すべき点では、数多くの意見が出ている。市民意見では、

*自由意見募集	1 回	809 件
*パブリックコメント	2 回	計画策定時 362 件 基本設計時 97 件

*政策審議会	1 回
--------	-----

*設計に関するワークショップ	2 回	一般市民、中学生
----------------	-----	----------

*施行ワークショップ	4 回	町会長役員、職業体験
------------	-----	------------

を実施した。

このように、市民意見等を参考にしてきた点が挙げられる。

建設に当たっては、計画の整合性、利便性、交通の体系など課題を多く抱え、市全体のグランドデザインをしっかりと検討したうえで計画のテーブルに乗せていくことが大切であると感じた。最後には庁内全体の見学をさせていただいた。最上階ではすべてガラス張りで、そこでは地元の高校生 4 人が自由フロアで勉強をされていた点、正に市民に開放の庁舎であると感じた。この佐野市の庁舎も佐野駅に最も近い庁舎であり、まちなぎわいにつながる庁舎であることも参考になった点が挙げられる。 以上

6 所感、提言事項、課題等	【議員氏名】佐藤信行 元々は、本庁舎建設に向けて、現在動きを加速しており、このタイミングでの他市への視察は大変有意義でした。 佐野市では、多くの市民の方の参加や丁寧な説明がなされてこられたことが印象的でした。建設中においても、建設現場を親子に見てもらうこともされており、市民に愛される市庁舎にしようとされたことを感じることができました。 本市においても、市民を置き去りにするのではなく、丁寧に説明をし、理解してもらえるような方法で進めていかななくてはなりません。
	【議員氏名】奥村孝宏 佐野市は、平成 23 年 3 月の東日本大震災で庁舎に相当なダメージを受け、同年 12 月議会で「設計委託料補正予算」が議決し、その後、市民への説明や意見募集を行ったとのこと。 市長の「市民はお客様、手間ひまかけても意見を聞く」というスタンスの下、市内 18 か所で市政懇談会を開き、市長自ら説明を行ったとのこと。 また、市民参加のワークショップを 6 回開催した他、政策審議会も行った。 市民からは、計画策定前に 809 件、計画策定時に 362 件、基本設計時に 97 件と 1,268 件の意見があったそうです。 ◆多治見市として 市役所本庁舎の問題は、市民に十分説明を行ったうえで、多くの市民からご意見をいただき、行政・市民みんなが納得し誇りに思えるような庁舎を建設したい。



